

司馬遼太郎

酒

之

解





文春文庫

105-8

酔って候

定価 340円

1975年5月25日 第1刷

1980年5月15日 第10刷

著者 司馬遼太郎

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

文春文庫

酔 っ て 候

司馬遼太郎

文藝春秋

目次

酔って候	7
きつね馬	137
伊達の黒船	203
肥前の妖怪	249
あとがき	307
解説 芳賀徹	309

酔
っ
て
候

酔
っ
て
候

高知城下では、

「南屋敷」

と通称されている。屋敷の南裏に潮江川しおえがわ（いまの鏡川）がながれ、北にお城がみえる。

邸内に、樟くすの老樹がある。潮江川の水あかに映はえるせい、ひどく樹相がいい。若者はこの樟がすきで、この樹きのために詩を十編もつくってやった。

抱いてもやる。

毎日、体をすりつけるようにしてのぼるのである。べつに樹のぼりが趣味なのではなく、樹にでもものぼっていないと、堪たえられないくらいなのである。

若者の樹のぼりは、屋敷の家来たちが吹聴ふいちょうするのか、城下でも有名だった。

「まるで樟が情人といちでもあるように、咆ほえながら武者ぶりつきなさる」と、ひとはいった。

事実、そうだった。遠くから咆えながら駈けてきて樹に抱きつき、足をまげ、手をあげて、ぎっ、ぎっ、とのぼってゆく。尻からげして、後ろに一本、居合刀いあいがたなをさしている。

馬で駈けてきて樹にとびつくとときもある。

かと思うと、酒好きのこの若者は、瓢ひきごを一つ腰にぶらさげて、しずしずと樹に登ってゆき、樹上で酒をのむことがある。酒はらくらくと二升は飲めた。というより、馬術、居合、詩作をしている以外は、いつも酔っていた、といったほうがいい。

「若様はよほどあの樟がお好きとみえまするな」

と、この南屋敷のお長屋に先々代から住みこんでいる廃人のような老用人が、やや軽侮するようにならかったことがある。

「あたりまえだ」

若者は、仇あだを見るような目で、老人を見た。

「この樟のほか、おれの相手になるような者がいるか」

若者は、自分のまわりにいるたれをもが気に食わないらしい。

「はてはて」

老用人が、口をゆがめた。

「あの樟めが人のようにものを申しまするので」

「言わぬが、思慮ぶかそうな顔をしている。そういうことのわからぬ人間は、ただ立ってあるくけものにすぎぬ」

「これはお手きびしい。若様は詩人におわしますからな」

「祖父江」

若者は、老用人をよんだ。

「殿と申さぬか。すでに若様ではない」

二年前に、家督を継いでいる。城下では南御屋敷様、とよんだ。南様、ともいう。東様や西様というのもある。いずれも藩主の一門連枝で、分家であった。

若様は、山内家十代豊策とよかぜの五男を家祖とする分家の家に生まれ、生涯を無役ですごす。そう約束づけられている。

(飼いごろしだな)

そう思うことがある。その飼料として藩庫から蔵米くらまい千五百石が支給される。知行ちぎょうではないから、領地も領民もなく、役につくことがないから、藩に対してなんの発言権もない。自然、家中でも、こういう御連枝は貴族として崇めあがられても、人として畏れおそられることはない。

(おもしろい稼業だ)

と、われながら思うことがある。生きていくことだけが、一生の仕事なのである。

若者は、体技にむく体をもっていた。五尺六寸で、腰に弾機はねがついているように敏捷びんしょうだった。

候 酔って 候
剣は無外流の手島市平に学び、馬術は源家古流、居合は長谷川流の谷村亀之丞かめのじょうの指導をうけてい
る。とくに馬と居合に練達し、谷村亀之丞などは、

11 「殿は、居合でめしが食えまするな」

とまで言っていた。

若者は、樟の下枝までのぼる。そこからとびおり、おりながらキラリと抜き、目にもとまらぬすばやきで鞆たもとにおさめ、トンと地面に立つ。そんな芸もできた。

生母は河むこうの石立村の郷士の娘で、父豊著とよあきらの側室である。追手門筋おうちもんすじの父の隠居所に住んでいて、めったにこの屋敷に来ないが、あるとき濡れ縁からこの若者の物狂おしい居合芸を見て、「若様はなぜそのようなことをなされます」と、いった。

「身の内に、火のようなものがあります。じっとしていると、悶もだえ狂いそうになります」

と、若者はいった。火のようなものを消すには体を激しく動かすか、詩をつくるか、酒をのむ以外に手がなかった。女も欲しくはあったが、気に入った侍女がない。この屋敷の女奉公人といえ、そろいもそろって醜女しごめで、この若者には手をつける気もしなかった。

その点、異常であった。醜女をみると、肌が戦慄せんりつし、その者のたてた茶も気味がわるくて飲めない、というところがある。自然、夫人をまだ迎えていなかった。好みがむずかしくて、一門連枝、家老級の家の年頃の娘について下ばなしめいた話が出て、

「あの家の娘の顔は、塩が吹いておる」

とか、

「おれは蔦つたがきらいだ。なぜなら、蔦の中にはとかげが棲すむ。あの娘はとかげに似ている」
などといっていた。話が煮えない前に立ち消えになってしまう。

ことし、二十二歳である。

嘉永元年九月、その日、潮江川の対岸の筆山ひつぎんの落葉樹がようやく色づきはじめたので、若者は例の樟の樹上に登り、酒を飲み、筆紙を用意して詩想を練っていた。

樹上から、塀むこうの路上がみえる。平素は閑寂としたこの屋敷町がひどく物さわがしく、路上を袴かみしもをつけた武士などがあわただしく往ゆき来している。

「なにごとか」

と樹上から老用人にたずねたが、老用人はさあ何でございましょう、と関心を示さなかったため、(まさかいくさが始まるわけでもあるまい) と思い、酒をのみつづけていた。

夕暮になったが、騒ぎはやまない。

なにしろ世捨人同然の連枝の屋敷だから、何事があった、と藩から急を報しらせる者もなく、近所の武家屋敷の者も、いかに近所とはいえ、身分のかけはなれたこの屋敷に事情を教えにきてくれるわけでもない。

江戸から城へ早駕籠はやかごがついたのである。

若者はなにも知らずに夕食を終え、夜、それも夜更けに、もはや寝ようと思っっているやさきに、門前に人語がした。

家老の深尾相模さかみが蒼くなって訪ねてきたのである。別室に招じ入れると、

「お人ばらいねがわしゅうござりまする」

と、落ちつきのない眼でいった。若者がそのとおりにすると、

「江戸で殿が急死あそばされました」

と、深尾がいった。

「聞いている、しかし先々月のことだ」

と、若者は驚かなかつた。去々月、藩主豊熙とよひろが三十四の若さで病死した。豊熙には子がなかつたため、養子届を出してあつた実弟の豊淳とよあつ二十五歳がすぐ相続し、幕府も許可し、その襲封しゅうほうの御礼のためついでこの間、国許くにもとを出て江戸へむかつたばかりである。

「いや、その豊淳公がお亡なくなりあそばしたのでございます」

これには、若者も驚いた。人というものはそうも短時間のあいだにころころと死ぬものだろうか。「しかし、御逝去ごせいきよのことは、公儀にも家中かちゆうにもいっさい内密でござります」

深尾は、ふるえていた。むりもない。襲封早々で急死した新藩主には子がなかつた。嗣子ししもなく、養嗣子も届け出ていない場合は、改易かいてき、よくて国替え、減封である。徳川初期以来、この制法で消滅した家はかぞえきれない。

「もしこれが公儀に漏もれば、土佐二十四万石山内家は、廃絶でござりまする」

となれば、筆頭家老深尾相模も禄をうしなつて浪人の身となる。むろん、この若者も流浪の身にならざるをえない。

「されば、殿様は御遺骸こそ江戸鍛冶橋御屋敷の庭内にお埋め申しましたが、表むきはいまだおなくなりあそばさず、御病中とし、手ばやく江戸御留守居の者が御養子を公儀へ相届けました。

——その御養子とは」

と、深尾は食い入るように若者を見て、

「あなた様でござりまする。すぐ江戸表へ御出立ありまするように」

若者は茫然とした。

血縁のうすい自分に、ありうべきことではなかった。急死した藩主には歴れつきとした実弟がいるのだ。ただその実弟は惜しくもこの春に支藩麻布家へ養子にゆくことがきまってしまっている。もうひとり弟がいる。これはまだ三歳の幼児であった。

「おれがか」

若者は、うめいた。信じられぬことであった。藩主一門の日蔭者の分際が、一躍、土佐侍従、大広間詰め、二十四万石の太守になるのである。

「相模、なつてやろう」

と、自分でもおどろくほどの大きな声を出してしまった。

深尾相模はその声にへきえきし、ちよつと若者を小馬鹿にしたような顔で、「城内で家老たちが待っておりますので」といってそそくさと辞し去った。

そのあとわざと不機嫌な顔をした。若者は座敷をはねまわりたいほどの衝動をおさえ、まさかいまの深尾相模め、あれは筆山のきつねではあるまいか、とおもったりした。

詩を作りたい、と思った。

しかし筆をとってみると、頭に無数の星が熱っぽく飛んでいるようで、詩想がすこしもまとまらず、一語のことばもうかばなかった。やむなく、文章をかいた。